

「家なる人も待ち恋ひぬらむ」

——『万葉集』巻四、大伴坂上郎女の六五一歌の解釈をめぐって——

井ノ口 史

一 六五一歌の解釈をめぐる問題

ひさかたの天の露霜置きにけり家なる人も待ち恋ひぬらむ
(4651)

『万葉集』巻四に収録された大伴坂上郎女の作である。

題詞には「大伴坂上郎女歌二首」とあるのみで作歌事情には触れられていない。当該歌と一括されている六五二歌は、玉守に玉は授けてかつがつも枕と我はいざ二人寝む

(4652)

というもので、作者の生活史に関わる種々の情報を前提としつつ、「玉」を作者の娘、「玉守」を娘の夫と見て、母たる「我」の心を詠んだ歌であるとするのが一般的な解釈であった。そうした見方は六五一歌の解釈にも及ぶ。

例えば、阿蘇瑞枝氏の『萬葉集全歌講義二』（笠間書院、

二〇〇六）では、

家を留守にしている出先で、秋冷の季節、水霜が降りているのを見て、留守居の娘たちを思いやつたものであろう。竹田庄や跡見庄に出かけている時の作か、とする説もあるが、必ずしも旅先にあつての作としなくても、外出先での作とみることもできよう。二首を一組とすると、京内の作とみる方がよい。六五二は、娘、おそらく二嬢の婚約がとつた際の母親の気持ちを詠んだものであろう。すでに娘が結婚した後と見る必要はあるまい。……二首は、いづれは離れなければならぬ母と娘のつながりのはかなさを嘆く気持ち共通しているように思う。

と推論する（傍線は引用者による。以下同じ）。

一方、伊藤博氏『萬葉集積注二』（集英社、一九九六）

は、次のようにいう。

上三句の景物と下二句の心情とのかかわりに味がある。作者は、今、娘婿とある場所にいる。その娘婿に対して、露の置くこの夜更けに一人夫の来訪を待つ娘のわびしさを押し量りながら早く訪れてくれるように促した歌と見える。……この娘婿は、前後の歌の作者から見て、次女二嬢の相手として許した大伴駿河麻呂である。家持も考えられなくはないけれども、この頃大嬢と離絶の関係にあったから、無理であろう。

これらの注釈書では二嬢や大伴駿河麻呂の名が挙げられているが、駿河麻呂の作として、「大伴宿祢駿河麻呂、娉同坂上家之二嬢」歌との題詞を持つ一首（巻三・四〇七歌）が残されており、坂上郎女にとつては娘婿にあたる人物であることは周知の如くである。六五二歌に娘を嫁がせる母の悲哀を読み取り、六五一歌の解釈にもそうした親としての情愛を前提とするという点で、『全歌講義』と『釈注』とは一致している。

しかしながら、「待ち恋」うという叙情の質についての両者の見解は異なっており、『全歌講義』では、下二句を「家なる人」（二嬢）が坂上郎女の帰還を「待ち恋」う情であると述べる。いわば、娘の母への「恋」であり、「家なる人も」という助詞が添えられたところに、娘の心中を慮

る母たる坂上郎女自身の愛情を読み取るというものである。それに対して、『釈注』によれば、当該歌は坂上郎女が駿河麻呂に向けて帰宅を促した歌であるという。「家なる人」（二嬢）が待つのは夫である駿河麻呂であり、「家なる人も」の句に含意されるのは、作者の面前にいる駿河麻呂の、妻を恋うる心ということになる。

題詞により一括されている以上は、六五一歌と六五二歌とが相互に補完しつつ形成する歌の世界を想定するべきではあるが、六五二歌における人物の比定を優先するあまり、表現に即した検討にいまだ不十分な要素が残されているのではないだろうか。本稿では六五一歌の上の句の「露霜」の景がいかなる表現性を有するのか検証した上で、そうした景への気づきが、「待ち恋」うという情にどのように関わるのかを明確にすることを目的とする。その過程で、「家なる人」の人物像についても併せて考察したい。

二 季節の推移と「露霜」

六五一歌の「天の露霜置きにけり」という句の表現性を明らかにするための手続きとして、「露霜」がどういった気象現象に該当するのか注意を払う必要があるだろう。しかし、平安末期の成立とされる『秘府本萬葉集抄』以来の語誌が蓄積されているため、その研究史のすべてを検証す

るには多くの紙幅を割く必要がある。ここでは、歌において「露霜」の語がどのように詠まれてきたか確認するに留めたい。

『万葉集』中、「露霜」の用例は当該例を含め二十六例を数えるが、その実態については、露とする説、霜とする説、露と霜の中間とする説、露と霜の両方とする説におおよそ分けられる。例えば、仙覚の『万葉集註釈』（巻第五）では巻八、秋の雑歌に収録された、

露霜にあへる黄葉を手折り来て妹はかざしつ後は散る
とも
(一五八九)

という歌に対して、「此ツユシモトイフコト、先達ノ料簡マチ／＼也」と述べ、

①露 ②霜 ③露と霜の中間の状態
との三説に言及する。⁽²⁾しかし、最終的には、「又今ノ歌ノ如クハ、夕、露ト霜トニカナヘリトイヘル義也」として露と霜のいずれをも否定しない立場をとる。

一五八九歌は、天平十(七三八)年の「冬十月十七日」に橘朝臣奈良麻呂の主催する宴で詠まれた十一首の内の一
首であり、当時、内舎人であった大伴家持やその弟・書持も参加して歌を残している。『万葉集釈注四』（集英社、一九九六）によると、宴の当日は太陽暦の十二月二日頃にあ
たるといい、歌群に含まれるすべての歌に黄葉が詠まれて

いるが、「露霜」の実態が露、霜、露と霜の中間の状態の
いずれであるにせよ、一五八九歌で「かざす」と歌われる
「黄葉」は、「露霜」によって色づいたものであると判断さ
れる。このように、木々を色づかせる「露霜」が詠まれる
例として、

妻隠る矢野の神山露霜にほひそめたり散らまく惜し
も
(10二一七八「詠黄葉」)

露霜の寒き夕の秋風にもみちにけりも妻梨の木は
(10二一八九「詠黄葉」)

秋されば置く露霜にあへずして都の山は色付きぬらむ
(15三六九九)

といった歌がある。一方、「露霜」が植物を散らしてしま
うことを惜しむ歌に、

さ雄鹿の采立ち鳴く野の秋萩は露霜負ひて散りにしも
のを
(8一五八〇「詠花」文忌寸馬養)

妻恋に鹿鳴く山辺の秋萩は露霜寒み盛り過ぎ行く
(8一六〇〇 石川朝臣広成)

秋さらば妹に見せむと植えし萩露霜負ひて散りにける
かも
(10二一二七「詠花」)

ともあり、萩などの植物に作用して、その衰えを促すもの
として詠まれる場合もある。「露霜」による木々の色づき
や散り行くさまを詠嘆する一種の慣用的な用法があったこ

とが知られるのであるが、「もみちにけりも」(10二一八九)や、「散りにけるかも」(10二二二七)といった例に顕著であるように、「露霜」が置いたことそれ自体ではなく、「露霜」によって変化した自然への気づきを詠出することが中心となっている点に留意される。そして、こうした表現性は露や霜にも共通しており、

雁が音の寒き朝明の露ならし春日の山をにはほすもの
は (10二一八一)「詠黄葉」

まそ鏡南淵山は今日もかも白露置きて黄葉散るらむ

(10二二〇六)「詠黄葉」

里ゆ異に霜は置くらし高松の野山づかさの色付く見れば
ば (10二二〇三)「詠黄葉」

秋山に霜降り覆ひ木の葉散り年は行くとも我忘れめや
(10二二四三)

といったように、『万葉集』の季節の歌では、「露霜」、露、霜の語が使用される場合に、その表現性において截然たる区別が見られないことが確かめられる。「露霜」は露や霜と同様に、秋から冬にかけての季節の推移を視的に表現するために選ばれる題材の一つであることは明白であるといえよう。では、そうした季節に関わる歌以外には、「露霜」にいかなる表現性が看取されるのか。露や霜の用例を見合わせつつ、さらに検討したい。

三 「露霜」と時間

『万葉集』に詠まれる露、霜、「露霜」には、動詞「消」の枕詞となるといふ共通点もある。白井伊津子氏の「上代被枕詞索引」(『古代和歌における修辭』塙書房、二〇〇五)を参照すると、露や霜には、

あさつゆの (あさぎりの) 消やすき我が身

(巻五・八八五 麻田陽春)

あさしもの 消なば消と言ふに

(巻二・一九九・二云 人麻呂)

といったように、「消」の枕詞としての用例が挙げられる。また、「露霜」も、

つゆしもの 消なば消ぬべく

(巻二・一九九 人麻呂)

つゆしもの 消ぬるがごとく (巻三・四六六 家持)

つゆしもの 消やすき我が身 (巻十二・三〇四三)

というように「消」の枕詞としての用例が挙げられており、こうした用例を勘案すると、露、霜、「露霜」の語が、はかなさというイメージを共有していることが、まずは確かめられる。

さらに、「露霜」については、「置く」の枕詞としての用法が知られている。「上代被枕詞索引」には三例が挙げら

れており、その中には天平元年に丈部竜麻呂が自死した際の、大伴三中による挽歌である四四三歌も含まれる。

……いかさまに 思ひいませか うつせみの 惜しき
この世を 露霜の 置きて去にけむ 時にあらずして

(三四四三)

四四三歌においては、「露霜」の語は枕詞ではあるが形骸化しておらず、はかなくこの世を去った丈部竜麻呂への哀悼の意を含む表現であることは疑いないであろう。

ところが、はかなさという側面のみでは解釈の難しい例がある。柿本人麻呂の「石見相聞歌」の長歌とその異伝における用法である。一三一歌には、

……波のむた か寄りかく寄る 玉藻なす 寄り寝し
妹を(一に云ふ)「はしきよし 妹が手本を」 露霜
の 置きてし来れば……

(二二二二)

とあり(異伝である一三八歌にも同じ句が用いられるが今は省略に従う)、「露霜の」以外にも人麻呂の創始による枕詞が多用されているが、渡瀬昌忠氏が、

……後に貴族女流の大伴坂上郎女が
ひさかたの天の露霜おきにけり家なる人も待ち恋ひ
ぬらむ(四ノ六五二)

と歌ったのは、(2)の人麻呂歌集略体歌(引用者注、
卷十一・二三九五歌)の「ひさかたの天の露霜」と人

麻呂の相聞長歌の「露霜の おきてし来れば」との直
接の影響であろう。これもまた、相聞の歌である。

と述べているのが参照される(柿本人麻呂の詩の形成
(五)―相聞長歌を中心に―「日本文学」15巻6号、一九
六六・六)。一三九五歌については次節で改めて取り上げ
るが、「石見相聞歌」において、「露霜」の語が相聞的な文
脈で用いられることに留意される。

一方、妻を一人石見国に置いてきた人麻呂の「冷たい
『露霜』が『置』いたような寒々とした情景が暗示されて
いる」とするのが、川島二郎氏(『露霜の置きてし来れ
ば』考)「山邊道 国文学研究誌」35号、一九九一・三三)
である。川島氏は「露霜」の語をめぐる研究史をおさえつ
つ、その「冷たさ」に着目する中で次の一首を参照歌とし
て挙げている。

秋萩の枝もとををに露霜置き寒くも時はなりにけるか
も | (10二一七〇「詠露」)

この歌は、卷十・秋雑歌「詠露」という標目のもとに配
列された九首の内の一首である。「露霜」という視覚情報
に言及しつつ、そうした景を通して了解される体感(「寒
くも時はなりにけるかも」)の方に主眼が置かれている。
同じく「詠露」の、

秋田刈る飯廬を作り我が居れば衣手寒く露そ置きにけ

る (10二二七四)

という歌では、「仮廬」で過ごす一夜の自身の体感を詠んでいるが、こうした「露霜」や露によって誘発される「寒し」という肌感覚は、更けていく夜という時間を背景とした独り寝の寂寥感や孤独感と結びつくこと⁽⁵⁾によって増幅するのである。

霜の場合に、その「寒さ」はいっそう顕著である。思ひ人の訪問を希求しながら、失望に変わるまでの時間の経過を女性の独白の躰で叙述したのが次の一首である。

我が背子は 待てど来まらず 雁が音も とよみて寒し
ぬばたまの 夜も更けにけり さ夜更くと あらしの吹けば 立ち待つに 我が衣手に 置く霜も 氷にさえ渡り 降る雪も 凍り渡りぬ 今更に 君来ま
さめや…… (13三二八二)

「寒さ」が心情のありように関わるような歌において、「露霜」や露、霜の景が詠まれる場合には、夕刻から朝にかけての一夜の内の景の変化について述べていることに注目したい。それが男女の交情の時間帯に重なるのは言うまでもないことである。六五一歌の上の句「天の露霜置きにけり」の解釈に際しては、こうした「露霜」の表現性を念頭に置くべきではないだろうか。

「露霜」が置くという変化が、季節の推移への詠嘆とし

て位置づけられているのか、あるいは、夜の更けていくこととの実感を誘発する景として詠まれているのか見極めることは、解釈に関わる論点の一つに数えることができるだろう。夙に、北村季吟『萬葉拾穂抄』は、

夏去秋来り。秋も深く露霜置まで外に在て、景物に感發して家をおもふ心なるへし。外にあるほとゝ哥にや。

として(『萬葉拾穂抄』影印・翻刻Ⅰ)塙書房、二〇〇二、による)、歌の背景に、夏から秋、さらには晩秋へと進む時日の経過を読み取り、「露霜」という晩秋の景に触発された「家をおもふ心」という主題に言及していた。

『拾穂抄』が示すのは、季節の推移を前提とする説である。また、鴻巣盛広の『萬葉集全釈』(第一冊。廣文堂書店、初版一九三五)が、

作者が兄の旅人と共に太宰府にゐた頃、即ち天平二年の秋の作かと思はれる。露の冷やかに置いたのを見て、他郷での長い滞在に驚き、故郷に遺して来た二人の娘を思ひ出したもので、彼女の母性としての愛情が、泉のやうに溢れる哀音は、人の胸を打つものがある。

とし、大宰府滞在時の歌とするのは、『拾穂抄』と同様に「露霜置きにけり」という句に季節の推移を認め、長期間にわたる作者の不在を想定した上での解釈であろう。

前節で見たように、「露霜」が季節の推移に関わって詠

まれる題材であったことは確かであるが、そうした歌々では景物の変化への慨嘆が詠まれていたのに対して、六五一歌では「露霜」による変化（葉が色づく、落葉するなど）は関心の外にあり、「天の露霜置きにけり」と上の句を結んでいる。すなわち、「露霜」が置いたこと自体に注意が払われているわけである。ここに季節の推移を主題とする歌との差異を認めるべきであろう。

さらに、下の句では、「露霜」の景を眼前にした自らの感懐ではなく、「家なる人も待ち恋ひぬらむ」という他者の心情を推量する句によって歌が閉じられている点にも留意される。『新日本古典文学大系 萬葉集一』（岩波書店、一九九九）は、「詠まれた場所は大宰府と見るのが最も歌に即している」として、脚注に、

葦辺行く鴨の羽がひに霜降りて寒き夕は大和し思ほゆ
(一六四)

という志貴皇子の一首を参照歌として挙げ、「霜夜の寒さに郷愁を誘われた歌」としている。しかし、志貴皇子の歌の結句にある「倭し思ほゆ」という郷愁が、「霜降りて寒き夕」という景を叙述する主体自身のものであったのに対して、六五一歌の結句において「家なる人」の心情を推量するという構成上の差異は、やはり看過し得ないのではないだろうか。このような点を勘案すると、当該歌における

「露霜置きにけり」という景は、季節の推移ではなく時間の経過を示す、男女の恋慕に関わる景として理解すべきであると判断される。

四 相聞歌における「露霜」

相聞歌における「露霜」の表現性を確認するため、六五一歌と同じ「天の露霜」という句を含む例を挙げておこう。

ぬばたまの我が黒髪に降りなづむ天の露霜取れば消に
つつ (7-1-16)

卷七の「詠露」という標目のもとにある歌で、夜、恋人の訪れを待つ女性を想定したものである。手に取れば体温で消えてしまう「露霜」のはかなさに、「待つ女」の憂愁を重ねた歌である。神田秀夫氏が、「霜が降りさうな風のない晩」に男性を待つ体験に基づくものとして、「露点から氷点までさがらうとする寒夜である」と述べるように（『万葉の夜の暗さ』『萬葉集研究 第六集』塙書房、一九七七）、「露霜」が降りても消えることのないほどに冷え切った髪と、その冷気を帯びるに至る時間の経過を窺わせる。同様に、「待つ女」の身に露や霜が置くとする例に次の歌がある。

君待つと庭のみ居ればうちなびく我が黒髪に霜そ置き
にける

（或本の歌の尾句に云はく、「白たへの我が衣手に露を置きにける」）
（12三〇四四）

下三句には異伝があり、本伝には黒髪に霜が置くことが、異伝には衣に露が置くことが歌われる。霜については、磐姫の八七歌の異伝として収載される、

居明かして君をば待たむぬばたまの我が黒髪に霜は降るとも
（2八九）

という一首が参照される。初句に「居明かして」とあるので、夜から朝にかけて一夜の内に降りる霜のことを言っているのが明らかである。

その他、待つ女性の立場から露を詠んだ歌として次のようなものがある。

誰そ彼と我をな問ひそ九月の露に濡れつつ君待つ我を待ちかねて内には入らじ白たへの我が衣手に露は置きぬとも
（10二二四〇）
（11二六八八）

一方、秋萩の咲き散る野辺の夕露に濡れつつ来ませ夜は更けぬとも
（10二二五二）

として男の訪れを請う歌もあるので、「露霜」や露、霜といった景物が、逢瀬が実現されなのまま経過する時間や、孤閨を嘆く相聞的情調を包摂し得る表現であることが確か

められるのである。こうした例に照らすと、六五一歌の「露霜」の景が訪れを待つ身を連想させ、下の句の「待ち恋ひぬらむ」という推量に結びつくことに得心が行く。

待つ女性の詠とは対照的に、訪れる側にとつての「露霜」の景を詠んだのが先掲渡瀬論において言及された卷十一「柿本人麻呂歌集」歌の内の一首、二三五五歌である。

本文は、「行々 不相妹故 久方 天露霜 沾在哉」というもので、初句「行行」の訓義に関して種々の議論がなされてきた。中でも大きな影響を与えたのが、渡瀬昌忠氏の「人麻呂歌集の略体歌と訓読漢字——「行行」の歌と文選・爾雅」（『萬葉』129号、一九八八・八）であろう。渡瀬氏は旧訓「ゆけどゆけど」であった初句に着目し、『代匠記』が当該歌との関連性を指摘した古詩十九首の一節「行行重行行」に対する李善注に、『楚辞』の「悲莫悲兮生別離」が引用されている点を考慮に入れ、

古詩第一首前半の「行行」の主体である男性は、「君」を待つ女性の思いと同様に、妻との生別離の悲哀を嘆いているものと見なされるであろう。それは、当面の略体歌の「行き行きてあはぬ妹ゆゑ」と歌う男性の立場と重なりうるのである。

とする。さらに、同氏の『万葉一枝』（塙新書、一九九五）にも、「古詩十九首」の第一首（「行行重行行、与君生別

離。相去万余里、各在天一涯。道路阻且長、会面安可^レ知」について、「遠行の夫と、生きながら別離し、再会は期しがたい、という待つ女の歎きを表現したもの」として、「嘆く主体の立場は、人麻呂歌集の歌では『妹』を思う男性であるし、文選の古詩では『君』を思う女性であるが、『行行』が男の遠行をいう点は共通する」とする。渡瀬氏によれば、二二三五歌の「露霜」の景は、一夜の逢瀬の非実現というよりも、長きにわたる別離の経験の中で見出されたものとなるが、二二三五歌に対して「遠行の夫」という主体を認定するか否かは、「行行」の句の典拠の解釈に関わるものであり、「露霜」の景の表現性それ自体に直接するものではない。

『万葉集』には、時間が経過したのに恋人に逢えない落胆を歌った、

色付かふ秋の露霜な降りそね妹が手本をまかぬ今夜は

(10二二五三)

白たへの我が衣手に露は置きぬ妹は逢はさずたゆたひにして

(11二二九〇)

といった男性の立場からの歌があり、また、妻訪いの道中を詠んだ歌として、

露霜に衣手濡れて今だにも妹がり行かな夜は更けぬと

も

(10二二五七)

馬来田の嶺ろの笹葉の露霜の濡れて我^わ来なば汝は恋ふばそも

(14三三三二)

という歌もある。二二三五歌の訓について諸説あるが、今は『補訂版 萬葉集 本文編』（塙書房、一九九八）に拠り、初句を「ゆきゆきて」、第四句を「あめのつゆしも」とする理解に従いつつ、いまだ実現しない逢瀬に関わって露や「露霜」の景が詠まれるという共通性を有することを重視したい。

前節で引用した渡瀬論（柿本人麻呂の詩の形成（五）

―相聞長歌を中心に―）では、「石見相聞歌」の創作の際に人麻呂の念頭にあった作として、二二三五歌の他、二二五七歌、三三八二歌の三首を挙げ、「露霜」は、民謡の世界では、妹に逢うためにそれに濡れて行くものとして歌われた」と推定している。今日では、作者未詳のこれらの歌々が、「石見相聞歌」に先行する作であるとは必ずしも断じたいが、訪れを待つ時間の経過や通い路の困難を、「露霜」という気象現象によって可視化しつつ、それぞれの心情を示唆するという表現の形式を認めてよいのではないか。つまり、「露霜」の語は、秋から冬にかけての季節の推移による景観の変化を媒介する自然現象として詠まれる一方で、相聞歌においては逢瀬の時間帯を象徴する景物として、逢瀬の非実現を男女それぞれの立場で悲嘆し苦惱

する背景となるのである。

六五一歌では、「露霜」が置くという景に誘発され、「待ち恋」う「家なる人」の存在を想起し、その心情を推量してみせるという構成となっているが、「待つ」という語との親和性を勘案すれば、「家なる人」が女性である蓋然性は高く、その女性が「露霜」の置く時刻に「待ち恋」う相手は男性であろう。少なくとも、歌の主体の郷愁や母と娘との間の情を示す要素を見出すことはできない。「家なる人も待ち恋ひぬらむ」という推量は、帰る場所を持つ男と、その帰還を待つ女の存在を前提にしたものであり、六五一歌は、相愛関係にある一対の男女の外側にいる女性の詠として理解すべきではないだろうか。

五 「家なる人」の解釈

前節では、「露霜」の景の表現性に即して「待ち恋」うという情の内実が、歌の主体とは別の女性から男性に向けた恋慕であることを述べたが、さらに、「家なる人」という句に着目したい。時代は下るが、平安中期に成立したとされる『古今和歌六帖』第五帖の「いへとじをおもふ」という項に、「やかもち」の作として六五一歌の類歌が収録されているのが参照される（引用は『古今和歌六帖』『新編国歌大観第二巻』角川書店、一九八四による）。

ひさかたのあまの露しもおきにけりいへにあるいもも
まちこひぬらし (二九九一)

四句目に「家にあるいも」とあり、作者名を「やかもち」とすることから、男女間の情愛を詠んだ歌としてあることが明示的である。六五一歌における「家なる人」との差異の意味するところは何か、坂上郎女の作において「人」が用いられる用例を確認しておこう。年代の判明する歌に用いられている例としては、天平七年の、新羅の尼理願が逝去した際の挽歌中の二カ所を挙げることができる。

たくづのの 新羅の国ゆ 人言を 良しと聞かして
……頼めりし 人のことごと 草枕 旅なる間に…… (三四六〇)

さらに、天平十八年、甥である家持が越中守として赴任する際に贈った二首の歌に、

常人の恋ふといふよりは余りにて我は死ぬべくなりに
たらずや (18四〇八〇)

片思を馬にふつまに負ほせ持て越辺に遣らば人かた
はむかも (18四〇八一)

とあり、これらの例においては、いずれも抽象的な他者や複数の人々を意味する語として用いられている。さらに、六五一歌と同じ巻四の用例を探ると、「怨恨歌」において、……ちはやぶる 神か放けけむ うつせみの 人か障

ふらむ……

(4619)

とあり、恋の障害としての「人」が設定される。これと同じように、「大伴坂上郎女歌一首」という題詞を持つ、

心には忘るる日なく思へども人の言こそ繁き君にあれ

(4647)

という歌には恋の相手の噂をする「人」が詠まれ、「大伴坂上郎女歌六首」とある内の、

あらかじめ人言繁しかくしあらばしゑや我が背子奥も
いかにあらめ

(4659)

汝をと我を人そ放くなるいで我が君人の中言聞きこそす
なゆめ

(4660)

という二首でも、「人言」や、二人の仲を裂く「人の中言」
が詠まれている。さらに、「大伴坂上郎女歌七首」にも、

人言を繁みや君が二鞆の家を隔てて恋ひつづいまさむ

(4685)

青山を横ぎる雲のいちしろく我と笑まして人に知らゆ
な

(4688)

という二首が含まれる。こうした用例を通覧すると、坂上郎女の相聞歌においては、歌の主体と恋の相手との関係を阻害する存在に対して、「人」という語を用いていることが確認できるのである。

そもそも、『万葉集』中に、「家なる人」という語を用い

るのは当該歌のみである。それに対して、「家なる妹」については、

山越しの風を時じみ寝る夜落ちず家なる妹をかけて偲
ひつ

(116)

大伴の三津の浜なる忘れ貝家なる妹を忘れて思へや

(168)

難波潟潮干のなごりよく見てむ家なる妹が待ち問はむ
ため

(6976)

といったようにいくつもの用例があり、いざれも、歌の主体である男性にとつて親密な関係性をもった恋慕の対象として詠まれている。こうした用例に比較すると、六五一歌の「家なる人」という句は、歌の主体との心理的な距離を含蓄しているものと判断してよいのではないか。『古今六帖』に「家にあるいも」と改変された和歌が収録されたのは、決して偶発的な要因によるのではなく、「待ち恋」という慕情が「家なる人」という語句と結びつくことに対する違和感を示唆するものと推定される。

さらに、「待ち恋ひぬらむ」という句についてはいかがであろうか。『万葉集』中で、当該歌の他に、同じ句を含むものは次の二首である。

いざ子ども早く日本へ大伴の三津の浜松待ち恋ひぬら
む

(1163)

ぬはたまの夜明かしも船は漕ぎ行かな三津の浜松待ち
恋ひぬらむ (15三七二)

六三歌は山上憶良が遣唐使として唐にあつた時、家郷にある人を思つて詠んだ歌であり、三七二一歌は天平九年に帰国した遣新羅使に随行していた一人が播磨国家島で詠んだもので、先行する憶良の歌に学んだものとされる。いずれの歌においても、「待ち恋ひぬらむ」と推量した上で、「早く日本へ」、あるいは「夜明かしも舟は過ぎ行かな」とし、自らの行動によつて待つ人の心を慰撫することを指向する。ところが、六五一歌では推量するものの、それが何らかの行動を起こす契機となるわけではない。自ら動くことがないのは、一对の男女の関係から疎外された位置にあることを示すものであろう。

おわりに

従来は、坂上郎女の六五一歌について、作者とその周辺の人物の相関を前提として解釈するのが一般的であつた。それに対して、本稿では「露霜」の表現性及び「家なる人」という句を手がかりに、現実の人間関係に依拠しない歌の読みを試みたのであるが、最後に、題詞において一括される六五二歌の解釈に関する見通しを述べておきたい。

六五二歌では、「玉」とそれを所有する「玉守」、そして、

「玉」を「玉守」に授け、枕と二人で寝ようと述べる歌の主体が登場する。この一首を、作者が自分の愛娘を夫となる人物に託すことの寓意であると見る説は少なくない。確かに、坂上郎女が大嬢に贈つた歌において、大嬢に対して「海神の……玉にまさりて思へりし我が子」(19四二二〇)という句を用いているが、この場合、「玉」は「我が子」という語と共起しており、母親の娘への愛着を表現していることが明白である。それに対して、六五二歌では、下の句の「枕と我はいざ二人寝む」という、孤閨を慨嘆する女性の口ぶりに続いていくことに注意を払う必要があるのではないか。

『万葉集』において枕が極めて相聞的な素材であり、「その大半は男女の情交にかかわつてうたわれている」ことは、東茂美氏(「下和の壁」『大伴坂上郎女』笠間書院、一九九四)の指摘するところである。「二人」で「寝」と詠うことは、大津皇子の一首、

大船の津守が占に告らむとはまさしに知りて我が二人
寝し (2一〇九)

や、人麻呂の「泣血哀慟歌」における「我妹子と二人我が寝し」(2二二〇)などにその典型が見られるように、「男女の情交」を直ちに連想させる表現である。「玉」を手放した後の心を慰撫する手段として「枕」との共寝を引き合

いに出すという構成に着目すれば、「娘を結婚させた後の親の心を表現」(『和歌文学大系 萬葉集(一)』明治書院、一九九七)したものであるといった解釈をすることは躊躇される。男女間の恋歌を装う、という作者の意図を想定すること自体は許容されるにしても、「玉」の喪失の代償として「枕」との共寝に言及する一首に対して、愛娘を嫁がせた母としての寂寥感に限定した解釈を施すことは困難であろう。

六五二歌の初句の本文に「玉主」とあるのを、「たまもり」と訓むか「たまぬし」とするといった点を含め、¹¹⁹⁾ 歌句に即した精密な検証が不可欠であることは言うまでもないが、男性を「玉」に喩え、本来の「玉主」である女性のもとに帰した後の、独り寝をする自身を嘆いてみせたという解釈に留めておくことが穏当ではないだろうか。

六五一歌と六五二歌の二首は、一対の男女の関係性から疎外された女性の立場からの詠であり、六五二歌の「我はいざ二人寝む」という意思の表明は、六五一歌において主題とした「待ち恋」うという「家なる人」の恋慕に對置されたものと考えるのである。

注

(1) 以下、『萬葉集』の引用は原則として『新編日本古典

文学全集』(小学館)に拠る。

(2) 或ハ、露ヲ、ツユシモト云。霜ハツユノナル物ナレハ、露ヲツユシモト云トイヘリ。……或ハ、霜ヲツユシモトイフ。露凝成^レ霜、故也。……或ハ九月ハカリノ寒露ヲ云。露ノシモニナルホトナレバ、露シモト云。霜ニモナリハテズ、ナヲ露ニテ、又露ニモアラヌホト也。コレハ、中間ノ位ニアタレリ。三ノ義ノ中ニハ、此義甚深也。(『仙覚全集』『萬葉集叢書』複製版第二刷(臨川書店、一九七七)による。)

(3) 「露霜」を「負ふ」とする表現について孫静冉氏は次のように述べる(『萬葉集「露霜」試論』「比較文化研究」129。日本比較文化学会、二〇一七・一二)。

……漢詩文で、「負霜」は植物や物事を壊滅させるというマイナスな存在としてイメージされていた。この点で一致している『萬葉集』の「露霜負」という表現は、漢詩文の「負霜」という表現内容を受容したのではないだろうかと考えられる。

「露霜」の気象現象としての実態と、用語としての「露霜」の持つ表現性とは分けて考える必要があると思われるが、この点については改めて検討したい。

(4) 卷十六の繰兒の悲劇を記した左注的題詞には次のような文言がある。

或曰、昔有三男、同娉一女也。娘子嘆息曰、
「一女之身、易滅如^レ露、三雄之志、難平如^レ石。
遂乃仿^レ倅池上、沈^レ没水底。」

家持「処女墓の歌に追同する一首」(19四二一)に「露霜の」が「過ぐ」の枕詞として位置づけられているのも、これに準じて考えてよいであろう。

(5) 平館英子氏は「石見相聞歌」における「露霜の」の句について、川島論を参照しつつ、「妹」の存在への不安感を象徴しているのではないだろうか」と述べる(『萬葉悲別歌の意匠』塙書房、二〇一五、初出二〇一〇)。

(6) 卷二・八七歌(「ありつつも君をば待たむうちなびく我が黒髪に霜の置くまでに」)にも髪に置く霜が歌われている。八七歌では結句の用字が「霜乃置方代日」という文字遣いとなっている。また、中国文学の例を参照しつつ、白髪の譬喩であると見る説もある(澤瀉久孝氏『萬葉集注釈卷第二』中央公論社、一九八三、初版一九五八。稲岡耕二氏『萬葉集全注卷第二』有斐閣、一九八五)。

(7) 露や霜が置くのは女性の髪とは限らない。

鴨じもの浮き寝をすれば蜷の腸か黒き髪に露を置きにける (15三六四九)

という例がある。題詞によれば、一行が「佐婆の海」(周防灘周辺)で逆風に遭い漂流し豊前国「分間の浦」(大分県中津市)に着いた後の歌で、不自由な旅寝の夜が髪に置く露という景を通して描出されている。また、ぬばたまの夜渡る月をおもしろみ我が居る袖に露を置きにける (7一〇八一)

ともあるように、必ずしも愁いを帯びた景に限定されな

いが、露が置く、と歌うことが、少なくとも夜から朝にかけての時間の経過を背景とすることには留意しておく必要がある。

(8) なお、『新編全集』(一九九五)では、「行けど行けど……天露霜に」と訓み、「新大系」(二〇〇二)では、「行き行きて……天露霜に」と訓んでいる。

(9) ただし、多田みやこ氏は、恋歌における「人」について「見る」こととの関わりに着目し、「常に障害として認識するだけでは片手落ちのように考えられる」と述べている(『万葉集・恋歌における「人」の意味』「上代文学」76、一九九六・四)。

(10) 他に、8一四六九、12三一六一、15三六七一、20四四一五、20四四二三がある。

(11) 「家なる人」の表現性について考えるにあたって、「家人」の語を参照すると、

家人の待つらむものをつれもなき荒磯をまきて伏せる君かも (13三三四一)

天皇の 遠の朝廷と 韓国に 渡る我が背は 家人の 斎ひ待たねか 正身かも 過ちしけむ 秋さらば 帰りまさむと…… (15三六八八)

石田野に宿りする君家人のいづらと我を問はばいかに言はむ (15三六八九)

といったように、挽歌において、死者となった人物の帰還を待つ家族を第三者の視点から描出する例があることも看過し得ない。他に、自らの家人をいう、

家人に恋過ぎめやかはづ鳴く泉の里に年の経ぬれば
(4六九六)

家人の使ひにあらし春雨の避くれど我を濡らさく思へば
(9一六九七)

といった歌もあるが(他に9一六九八、15三六三六、20四三七五、20四四〇九)、「家人なる妹」の用例に比較すると、叙述の客観性が認められよう。また、令制の家人を指す用例もあるとされる(11二五二九『新編全集』頭注)。

(12) ……歌の表現に注目すれば、すでにいわれているような母親の安堵と寂しさをうたう歌とすることは、まずできな。『集』中において「枕」をうたい込めた歌をひろつかざり、その大半は男女の情交にかかわつてうたわれているからである。(東氏による。)

(13) 『古今六帖』に初句「たまぬし」として「枕」の項に収録する(第五帖三三三五)。